

日本をテーマにした外国切手

平 岩 道 夫 (切手評論家)

このところ全国各地にデパート内の趣味の切手売場や、切手店をのぞいてみると、天皇・皇后両陛下を描いた切手とか、野球でおなじみの王・長嶋を描いた切手、歌手の三波春夫、さらに日本のシンボル富士山や新幹線などを描いた“奇妙な外国切手”が、かなり見られる。

気の早い向きは日本の切手と間違えて

「あれ、この切手を買いました」

などといい出す始末。

こういった切手をよく見ると、シャルジャ、ラスアルカイマ、ウムアルキワインといった、あまり聞きなれない国ぐに？の名称が描かれている。

いったい、これはどういうことだろう。

実はこういった“日本を描いた外国切手”の一部は、日本の切手業者が、先方とカゲでヘンな取引をして作らせている疑いがある。また、皇室を商品化しており、宮内庁は正式に認可しているのか——というような質問を数年前、野末陳平参議院議員が国会でもするなど、話題も豊富。

シャルジャ、ラスアルカイマ、ウムアルキワインといった国ぐには、ペルシャ湾沿岸の土侯国（現在はアラブ首長国連邦）に多いが、いずれも「日本に敬意を表して発行します」といった妙な理由で、次から次へと日本をテーマにした切手を作り、日本の切手マニアのふところを軽くしているというわけだ。



ついにはズバリ“日本のサッポロビール”を描いたものとか、“日本の雪印バター”まで登場する始末。1971年（昭和46年）にラスアルカイマから発行された6種のうちの一部だが、札幌オリンピック冬期大会を記念した、ということになっている。

ご丁寧なことに、サッポロビールの切手と札幌市街の風景を描いた小型シート1種も発行された。

他の4種の切手の図案としては、北海道庁、知床岬、北海道の産物であるサケ、カニ、コンブ、木彫りのクマ、アイヌの衣裳など、すべて北海道一色。

つまり、日本の切手マニアにうんと買ってもらおう、というコシタンがありありのものばかり。

切手に描かれたサッポロビールの広報マンいわく

「うちには事前に話はなく、切手が出てから知りました。小国の“切手商売”も手が込んできましたなァ…」とあきれ顔。

切手収集家の中にも、切手として認める、という人と、認めない——という人もあり、何かとさわがしいきょうこのごろだ。